女の会通信

今号の話題

＊特集　女たちの現在

＊母と娘の間には？

＊珈琲ぶれいく

1994. 6. 15

特集　女たちの現在（いま）

女たちがやっと自己主張をはじめてどれくらいになるでしょうか。何十年、いや二十年ぐらいのものでしょうか。男社会にどっぷりつけられている女たちは、女同士の意見が噛み合わないと、その原因を女性差別の構造のなかによりも、ついつい女同士の対立として見がちです。その中でも、職業をもっているか無職かということは、大きな対立点になっています。どちらの側にも、その人なりの理由や必然性があっての選択だったはずです。本来は、対立するようなものではなく、どちらにも厳しい現実とそれなりの楽しみや充実感があり、お互いに少しの想像力を働かせれば、不満ながらも「これが女の現実よね」と言いつつ、お互いを支えあい、やがては男社会をひっくり返してしまうような共同戦線がはれるはずだ、と考えるのはあまりにも楽天的な発想でしょうか。…………というわけで、今回はとても魅力的な女性にお話をうかがいました。

N・Nさんのプロフィール

一九四五年生まれ。夫と男の子三人の五人家族。結婚当初から専業主婦で夫の赴任先の五島、平戸などを経て現在は長崎在住。一番下の子供さん（中学三年）がまだ小さかった頃、育児を夫に任せて、日曜日の公民館の陶芸教室に通い、以後その魅力のとりこに。現在は佐世保のパオでは常時展示販売中。おつれあいは知る人ぞしる書家。夫婦での書と陶器の個展も数回をかぞえ、その合間には、市民運動にも片足を突っ込み、職業欄に専業主婦と書くわりには主婦業以外に多忙の毎日を過ごされています。

***どういういきさつで結婚されたんですか。

＊大学を卒業して、彼は長崎県の五島で教職につき、私は福岡で就職していたから、彼がほとんど毎週のように五島から福岡へきて、夜行列車で五島へ帰っていたの。だからもう逃げられないなあって思って

いた。私は最初私立高校に就職が決まっていたけど、結婚のために一年くらいでやめたら迷惑をかけてしまうと思って、教職にはつかず他の仕事を一年したんです。

＊＊＊おつれあいは、「彼女の親に結婚を許してもらうために教職についた」と周囲には言ってらっしゃるようですが。

　私はそれは聞いたことはないんですよ。彼はそう言っているようだけど。私が教職につきたいと言っていたから、彼もそう思ったんじゃないですかねえ。学生時代には、そういう話はしなかったんですよ。恋人同士という感じでもなかったし。そうねえ、知らない間に逃げられない状態になったというか。思い当る節はあるんだけど。じつは、学生時代に義理で仕方なくお見合いをしたんだけど、お見合いの当日にお見合いの相手の人と二人であるいていたら、偶然今の夫にばったりあったの。お見合いの相手の人は、まだ学生の私にお見合いを言ってくるぐらいの人だから、卒業したらすぐきてほしい、その代わり絶対に就職してほしくないといったの。お見合いのためにわざわざ外国から帰ってきたという人だった。今の夫は、それがお見合いだって解ったと思うのよね。

＊＊＊周囲の反応はどうでしたか。

　私の両親はお見合いの人を一応すすめたけど、私は「絶対就職してほしくない」というのがイヤだったの。女の友達は、今の夫との結婚はわざわざ苦労をしょいこむようなものだと、みんな反対しましたね。当時は「結婚は結婚、恋愛とは別」というような感じもあった時代でしたからね。

＊＊＊三姉妹の長女ということですが、小さい頃はどんな子供さんでしたか。そして、大人になって生きていくのにどんなイメージがありましたか。

　私は、大学へ入るくらいまでは、本当にものを考えない子供でしたね。ただもう、お利口さんという感じで、今から考えると「何でー？」という感じね。

でも高校のとき、すごい体験をしたの。

あの頃は、中学を卒業すると、クラスの半分が集団就職をするという時代だったの。高校は、中学校よりぐっと広い地域からくるから、クラスのなかでも知らない人がいっぱいいるでしょう。でも中にひとりだけ、なんとなく集団に入れないでポツンとしている人がいたから、私は何も知らなくていいつもりでその人に話しかけたくて、その人のお名前が変わっていたから、「めずらしいお名前ね。どう書くの。」と話しかけたの。その時のその人の顔の表情を今でもよく覚えているんだけど、そのあとで韓国名だとわかって、「あーっ！」というかんじで、自分のことがとても恥ずかしかったし、知らないということが恐いと思ったの。それから何となくいろんなことを考えるようになったのね。だから、大学にいきたいと思っていたわけではなかったけれど、もっと勉強したいなあと思って大学へ行くことにしたの。私が入った学部は、その当時は女の人がまだまだめずらしい商学部だった。同学年の商学部三百名のうち、女性は十名しかいませんでしたね。だから相手のことを男性だとか女性だとか意識していたらとても暮らしていけなかったから、男性でも女性でも、大人でも子供でも、人間対人間として考えるようになっていったの。だから私は、大学の四年間はとても面白かった。

＊＊＊私の場合は、経済的に夫にだけ頼るというのはとても不安（夫がこけたら皆こけるということ、言いたいことも言えなくなるということ）だったから、ずっと働き続けるために大学へ行ったというかんじだったんです。女が大学へ行くことと、女が働き続けるということは、つながっていませんでしたか。

まるっきりなかったですね。小さい頃からお利口さんで育ってきたし、父も母も、具体的に口にだしては言わなかったけど、女は可愛く男から可愛がられるのがいいという考えだったし、私も自然にそう思って育ってきたし。私が四年制の大学へ行きたいと言ったときも、母は、「女の子は短大ぐらいがいい」と本気で言ったぐらいだから。それでもやっと自宅からという条件で認めてもらったの。だから、

高校のときのあの経験がなくて、大学へ行っても私が変わっていなければ、あのお見合いの相手の人と結婚していたでしょうね。何回かお会いして素敵な人だとは思ったけど、「絶対に働いてほしくない。卒業したらすぐ結婚してほしい。」というのに対しては、女をそういうふうにしか見ていないのねと思ったもの。それぐらいには私も成長していたんだから。（笑）

＊＊＊現実には、伸子さんは仕事をやめて、長崎の五島に行かれましたよね。それはお見合いの相手が望んでいたことと、結果的には同じになりましたけど、長崎へ行かれるのに抵抗がなかったのはどうしてだったんでしょうか。

それは、ヨーロッパに憧れるか中国に憧れるかの違いのようなのかもしれない。その頃から、はっきり意識しないまでも、体制的なことと逆の方向にいっていたような、だからこういう結婚になったんじゃないかという気がします。夫との結婚は、学校の友達やゼミの先生など学校中みんな反対しましたね。

家族は違っていましたけど。なんで好き好んで苦労をしにいくのか、よく考えろって。今は友達も「よかったわね」って言ってくれるし、私も「うん、よかったわよ」って言ってます。

＊＊＊結婚しても働いている人にたいしてどういうことを感じますか。

私がずっと働いていたらというのは考えないけど、結婚しても働いている人を見たら「すごいなあ」って思いますね。だって家事もやってというのはすごいことですよね。尊敬しますね。それ以外に、働いている女の人にたいしてどうこう感じるというのはありませんね。それで、なにかでその家にお邪魔したときにおご馳走がパーッと並ぶと、「どういうこと!?」と思って驚いてしまいますよね。やっぱりすごいなあって思いますよね。

＊＊＊外で働いていないことにたいして、女も職業をもつべきだという建前があり、なにか後ろめたさのようなものを感じることがありますか。

後ろめたさというのはないですね。だって、家の中でしっかり働いているから。ただ、外で働いてないと、体験できないことや知りえないことがやっぱりありますよね。もちろん逆もあるでしょうけどね。専業主婦を選んだのだから、その中で専業主婦だからこそできることをしようと思いますよね。ＰＴＡとか地域とか友達とか、お互いカバーできることってたくさんありますからね。○○さんの妻とか、○○さんのお母さんとかいうのばかりではイヤよね。自分自身の目で社会を見たいじゃないですか。だから、何かの役目を引き受けるときでも、私でできることなら………と思って、やりましょうとなるのよね。働いているかいないかで、イヤだなあと感じるのは、ＰＴＡの役員を選ぶときですね。役員のなすりあい。できる人がすればいいのにと思うの。

＊＊＊いくら仲のいい夫婦でも、喧嘩をしたり険悪な雰囲気になったときに、夫の「俺が養っている」という態度が見えることがあるようですが、そういうことはありませんでしたか。

それだけは、ありがたいことに絶対ないの。それは、私が養ってもらっているという感覚がまるでないし、むこうもたぶん養っているという感覚はないんだと思う。もちろん喧嘩をすることはあるけど、そういうこととは無関係。どうして私にそういう感覚がまるでないということがわかるかというと、友達がおつれあいに遠慮があると話すのを聞いていて、何でそう思うんだろうということがよくあるからなの。「なんで？あなた、家事をしているでしょう？」って思うの。たとえば妻の両親の老後を夫の収入でみるのも、別におかしくもなんともないと思いますよ。

私達夫婦は昭和二十年生まれだから、学校教育を一番いいときに受けてきたんだと思うの。小学校のときの先生は、「君たちはいい時代に生まれた。」とか「男女平等」とかしょっちゅう言われていた。そして組合の集会の話なんかもしてくれていたから、組合の用事で自習になるときでも、「先生頑張ってねーっ」って送り出していたの。そして一番よかったのは、正副の学級委員を、性別に関係なく、得票の多い順に一番が正、二番めが副というのが当然だ

ったということね。
女の人が専業主婦になったあと外にでるということは、働くことであるかもしれないし、市民運動をすることかもしれないし、ほかにも色々あると思うの。私は、自分がこれで家事をしなくてよかったら、どんなに楽しいだろうと思うよ。（爆笑）一番イヤなのが家事なの。

＊＊＊専業主婦が、外で働いている女たちから批判されているように感じるというのは、どうしてでしょう。外で働いているからといって、大したことをしているとは限らないし、しっかり自立しているわけでもないのに、なんででしょうね。

私は「専業主婦」っていう言葉も変だと思うの。職業の欄に「主婦」と書くように言われるのもなんだか変よね。私は働いている女の人たちから批判されていると思っていないから、何とも答えようがないわね。でも働いている人は、キラキラしている人が多いもの。ないものねだりの願望じゃないのかなあ。自分にはないものを欲しがってしまうのよ。どちらにも素敵な人はいるのに。

＊＊＊私は男の人と話すとき、相談じゃなくて話をしているだけなのに、女に対して教えを垂れたがる男が多い、と思うことがよくあるんです。夫婦の間でそういうことを感じることはありますか。

小さいときから、男のひとはそういうふうに育てられているからね。私もそういうことを感じたことがありましたよ。でも一生暮らしていくには、今これを覆さないといけないと思って、意識的に、とことん言った。「そういうつもりじゃなくて……」とか「ちょっとしつこいけど……」とか、最近一年くらいかけて頑張ったの。今はとてもよくなっている。

それは我慢できないようなことではなかったし、彼にもわかるだろうと思っていたから、それまではとくに問題にもしなかったの。でも、もう解ってもらわないと、と思って。私達は、今は老後に焦点を合わせて生活をしているんだから。老後に特にこれをしたいというわけではないけど、夫婦でこういう

ふうに暮らしたいという夢みたいなものがあるじゃないですか。だから、こんなのはイヤだなあという関係ではいたくないもの。

＊＊＊外で働いている女性がすべて、自立したいと思っているわけでもなく、まして自立しているとは限らない、というのは数えきれないくらい見てきたんですけど、その辺のことはどう思いますか。

もちろん、働いているから自立しているとは限らないとは思うけど。でも、職業を持っていない女の人同士で話す場合は、かならず最後には、自分に収入があるかどうかが鍵になるよね、という結論になりますね。特に離婚なんかを考えた場合は。

＊＊＊一方では、職業を持っている女の人でも、夫婦関係が破綻していて離婚したほうがいいと思っていても別れることができない、というのがあるんです。経済的には自立していても離婚できない、というのはいったいなんでなのかという話になるんですけど。

そういうこともあるんですね。職業を持ってない女の人は、鬱積しているものが多いと思う。だから経済的な裏付けができたら、かえってぱっと離婚できるのかもしれないわね。

＊＊＊職業を持っている女の人との違いを感じられるときはありますか。

男だから女だからと区別して考えなかったのと同じで、女の人を分類して考えることがまるでないものだから、「ここが違う」とか比べるようなことはないですね。私自身は好き嫌いはありますけどね。

私がいい加減なのかもしれないけど、人を見るときに、「こんな人もいる、こんなこともある」っていう感じで、興味をもって人を見るということが強いみたいね。自分のこととしてあんまり考えないのかなあ。よく人に言われるのは、話をしても一見おとなしいように感じるけども、あとでよく考えたら、しっかり言っているって言われますね。そして強いことも言っているって。自分ではそうなのかなあって思うけど。私は人の話を聞くのがとても面白いと

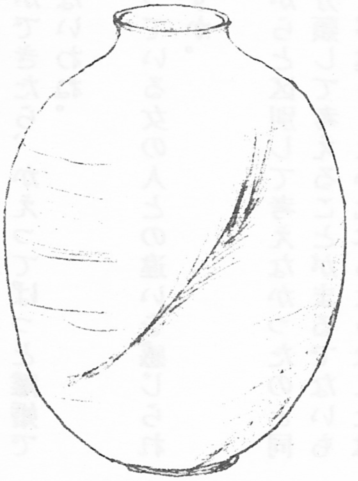
思うの。自分が話をするより。だから専業主婦かどうかというその人の状態より、その人そのものに興味がわいて話を聞きたいと思うのね。

――おわり

インタビューを終えて

初対面はもう五〜六年も前のことだったと思う。女の会の会員のツテで、唐突に集会の手伝いをお願いしたところ、気軽に「いいですよ」と返事をいただいて、真夏の炎天下で一日助けてもらったことがある。主催者側の段取りが悪かったにもかかわらず、イヤな顔ひとつせずに手伝ってもらった。その後もいろんな機会に顔を合わせたが、個人的に話を聞いたのは今回が初めて。あっという間に約束の二時間が過ぎ、結局四時間あまり。ついついＮさんの話に引き込まれて、本題から脱線することもしばしば。夫婦二人ででかけられることが多く、家でも夫婦で話をしていることが多いので、子供さんたちはいかにして夫婦の会話に割込むか、と戦々恐々としていたとのこと。Ｎさん流の自然体の暮らしぶりは、こんなふうに暮らせれば、私にも専業主婦ができるかもしれない、という気にさせるものがある。素質と環境の両方が違えば、生き方も違っていて当然というものだが、表面だけを見ればそうであっても、よくよく話してみればその違いは敵対するものではなく、お互いに女のいろんな生き方の、ある部分を生きているのだということが理解できる。それが女の現実なのだ。それなら、「女同士もっと仲良く」がやっぱり基本だ、とつくづく再確認した次第。また素敵な女性と出会うことができました。

（K）



母と娘の間には？

最近、いいのか悪いのか、胴体から膝までたっぷり脂肪と肉がとりまいている。肩もがっしりして二十代の自分とは別人のような体つき。そして困ったことにけっこうそれでいいと内心思っているらしくへたにやせるのも体力が落ちそうで怖いのである。口だけは一応元気にしてるのヨというところを見せねばと思っているのか「ヤセナクッチャ」などと格好つけてるが、とうの昔にウェストをもとにもどす努力は放棄した。

着替えの途中や入浴後のつれづれなるままに、鏡のなかの、わが逞しい裸体になかなか立派なもんではないかと厚い胸板を見たりする。「鏡よ鏡、鏡さん、世界中で一番醜いのは私じゃないでしょ、私じゃないって言って」と言いたいくらいの青春時代。体重計と鏡を見るのを忘れたら、太りっぱなしになるとよく体重計のおせわにはなった。美容室の大きな鏡に自分がますます貧相に見えていつもウンザリしていたものだが、いずれのオオントキニカけっこう悠々と顔などながめるようになった。若さも失い、もともと器量が悪いうえに白髪までふえて見栄えはますます悪くなっているはずなのに、「ウン、きょうの表情はなかなかヨロシイ！」などと鏡に向かってニンマリなどという日も結構あるのダ。

思えばうちの母親はヒドイ人だった。夫婦仲の悪い夫、坊主憎けりゃの口で、自分が生んでおきながら、まだ子供だった私に「お父さんに似て意地悪な目をしている」だのと、歯に衣着せぬけなしよう。姿形への誹謗中傷（？）は外から帰っても又母から言われるというダメ押し状態。それで素直にカワイク育つなんて奇跡に近い。おかげで顔が悪いと言われても「あら、悪かったわネ、あんたに関係ないでショ！」くらいはポンポン言い返せるようにはなったが、生れつき悪いのは顔だけじゃないので、性格の悪いのは少々気になる所ではある。ハハハ……。

きょうもきょうとて風呂上がりの何不自由ない体を鏡の前で総点検していたら、思い出した思い出した。そう、その日も風呂上がりの汗を防ぐため同じように鏡を見ていたら背中に一言、「あら、胸が下がっとる。」なんという母親。当時二十七歳くらいだった私。一瞬絶句し、ひと呼吸遅れで「ああ、まあネ」とは返事したものの、コイツ親じゃない、女同士のつめたあい目で私を見てるとギョギョッとしてしまった。まあたしかに大人の女同士ではあるけど、それにしてもよう言うわと呆れ返ってしまった。

ろくな母親じゃないとカッカして、まったく言いたい放題ではないかと、心の中で母親をさんざんこき下ろしてやっと怒りを収めた。

まあとにかくウチの母親はあの世代の女としては、標本になりそうな女だった。小説の主人公の女としても決して不足のない女だったと思う。怒りたいときは我慢などした試しはなく、（もっとも本人は違うというかもしれないが）大荒れ、父も手がつけられなかった。そうかと思うと子供も負けるほどの子供らしさで、溝に落ちてウエンウエン泣きだしたり、マヨネーズが酸っぱいのはマヨネエ酢だからなどとのたまわったりなどする。おかげで退屈だけはしなかったが、本人は母親になるのがたいへんだったんだなとこの年になってわかるようになった。

あの世に行ってもう十年以上たつが、とてもじゃないがマネもできなければ、あのハチャメチャぶりにかなうわけもないなと思ってしまう。

顔だけはまあよく似てきたと思う。（ダレダ、その他も似てるなんてコソコソ言っているのは！）

〜六月のあや女〜

珈琲ぶれいく

★お日さまをいっぱい浴びて真っ赤に熟れたぐみをもらう。洗って口に入れたら、渋い、甘い、酸っぱいが順番にやってきた。なつかしや。庭先になっているものなど最近は食べないらしい。深い深い味がした。（J）

★IAEAの北朝鮮への核査察問題が泥沼化する中、チマチョゴリの学生へのいやがらせが相次いでいる。日頃のふんまんのホコ先にしたにすぎない、こんなやり口はいつものこと。ホコ先の向けどころ、おさめどころを知ろうとしない迷子の大人たちへ「ちゃんとやれよな」と牙をむきたくなる。（C）

★手書きの通信を素朴でいいと読んでくださった方、ついに肩凝りに負けて機械に頼ってしまいました。ほかにもアチコチにガタがきているようで、気長に病気ともつきあう覚悟をしたところです。（Y）

発行者	長崎・女の会 「女の会通信」 編集委員会	事務局	長崎市滑石1-4-1-601 栗山洋子　気付 ☎0958-56-7595	印刷	連帯 長船労組	NO. 129